

平成三年十二月三十日 郷土史資料

四丁野

会田太郎兵衛家の
先祖に付いて

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

四丁野

会田太郎兵衛家の先祖に付いて

山崎善司

四丁野

会田出羽介正之の家

川家康の命にて、「増林林泉寺にあつたお茶屋御殿を会田出羽の屋敷地に移築し、即御殿を建て差出した」。

新編武蔵風土記稿 南後谷

之の、「会田出羽資久」の父資清は、小田原北条氏に仕えた。小田原衆所領役帳に記載されている、「会田中務丞信清の弟」としてゐる。

南後谷会田富右衛門家の、家譜中に出て来る、「会田三郎左衛門正重、当国鉢形城主北条氏邦が麾下に属し、越谷の地に住す」、「その子若狭正方は、太田十郎氏房に従いて討死す」、その子長子は若狭正忠・二子出羽正之と云う、正之越ヶ谷に住す」とある。

之の、『会田出羽資清家』（越ヶ谷会田出羽家）と『会田出羽介』が「出羽」が同じ為に、出羽村を開発したのは、「越ヶ谷会田家」と云う事になつてゐる。

之の、会田出羽正之が越ヶ谷の何処に住したかに付いての考察を進める事とする。

然し乍ら、新編武蔵風土記に、記されている、『越谷に住した、会田出羽介正之』とは、別家の如くであり、又、「越ヶ谷宿」内には、正之の屋敷と思われる地は見当たらない。

会田出羽介正之は何処に住したか？

「越ヶ谷会田出羽家」・「会田出羽資清」・「旗本

会田出羽正之の家敷は、何処に在つたのだろうか、と云う事に付いては、今日迄、論議されていない。

越谷市史には、「会田出羽資清の子、出羽資久は、徳

会田家」・「会田小左衛門資信」・「神明会田家」・「会田七左衛門政重」・「南後谷会田富右衛門家」・「葛飾飯塚会田家」・「関宿会田久兵衛家」・「大門会田家」等、それぞれに研究が進められて居る。

越ヶ谷郷と越ヶ谷宿

越谷市は嘗て、昭和33年に、越ヶ谷町・大沢町・出羽村・萩島村・蒲生村・大相模村・川柳村の北部・増林村・新方領村・桜井村・大袋村の二町九ヶ村合併して、市制が施行され、今日の越谷市となる。

越谷市では、今も旧村名を用いて、越ヶ谷・大沢・出羽・萩島・蒲生・大相模・川柳・増林・新方・桜井・大袋地区と呼んでいる。

この内、出羽地区の中に、四丁野と云う地がある。此所は、現在「越谷市宮本町」と云われている地域であるが、嘗ては、「越ヶ谷宿」分であったが、慶安（一六四八〜五一）之頃分村する。

江戸時代初期、日光街道が出来る以前の時代には、四丁野と云うは、現久伊豆神社（宮前町）を含む地域を指し奥州街道が、四丁野を岩槻に向かって通っていた。

日光街道が出来、宿場に制定されるに及び、四丁野村の中間を日光街道が通り、承応三年（一六五四）大沢と越ヶ谷を合わせて越ヶ谷宿となり、現四丁野は、岩槻への横道となり、地域が以前の半分となり、久伊豆神社を含む東半分が越ヶ谷宿地区となる。

今日でも、久伊豆神社の祭礼には、元村の四丁野地区の人達が御輿を担ぐ習わしと成っている。

会田出羽介正之の屋敷は、「越谷」の何処にあったかに付いては、先ず「越谷郷」と「越ヶ谷宿」の区分けを考えて見る必要がある。

越谷郷と云われた時代は詳では無いが、北条氏康文書の中に、「舎人・越谷は大郷也」と云う文書が見え、その時代既に、「越谷郷」が使用されていた事が解る。

越ヶ谷瓜の蔓に、

「御入国以前は、至而之大郷にて今云近在村々は枝郷と相見申候」。

「元和御検地之頃、大郷故、今云、登戸・瓦曾根・花田・四丁野・谷中・神明下・萩島・隅之山（今云袋山・恩間村也）・槐戸耕地等一村に而四千石程之場所也」。

夫より追々枝郷分村に相成申候、寛永中萩島村・袋山・恩間等相分、其後槐戸村七左衛門開発大間野・越巻付之村々に相分、其後登戸組・瓦曾根組等八条領に属し、慶安之頃花田組・神明組・四丁野組等別村に相分、寛文之頃四丁野道下組・谷中村と又之枝郷に相分れ申候」。

新編武蔵風土記稿に、「越谷に住す」とある区域は、江戸時代の「越ヶ谷宿」ではなく、天正之頃、太田十郎氏房の時代で、「越谷郷は大郷也」と云はれた「越谷」と解すべきであり、又、「出羽介が開発した「出羽村」があるので、正之の屋敷地は、出羽地区内と見る可きが至当であらう。

四丁野

△云田太郎兵衛家

の先代に付いて

四丁野会田太郎兵衛家の先代の解明に付いての、手掛りとなる文書が有るので記す。

此処に、越谷市荻島地区西新井に、齋藤若狭守藤原光郷を初代とする「齋藤家来由」と云う文書がある。

この書を、熟読すると、不思議な事が記されているのに気が付くであろう。

齋藤家来由 (抄)

初代

齋藤若狭守藤原光郷

天正十八年

卒

内室

華岳院殿桃林道見大居士
太田道溜持祐入道後裔妹
玉蓮院殿香誉松林清安大姉

六月 十日
天正十四年
六月 十日

卒

二代

齋藤加左衛門尉氏貞 岩月丸
悟真院清誉浄空不昧居士

寛永十四年
正月廿八日

卒

内室

初代若狭守光郷季女 くら
崇徳院念誉法春慈愍大姉

承応二巳年
十二月十日

卒

三代

齋藤治左衛門尉宗圓
一乘院頓誉宗圓即生居士

寛文十戌年
六月十二日

卒

D 内室

二世氏貞の息女 きよ
厚源院松誉蓮貞持信大姉

貞享四卯年
八月十日

卒

D

三代宗圓、実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男、此の仁自り、会田両姓を用う。

一男、幼名分からず、甚吾兵衛基親、四世を相続

二男、幼名平蔵崎玉高曾根頓吏を以て分株し会田両姓を用う、(以下略)

齋藤家来由の家譜中に、齋藤家当主で在り乍ら、「齋藤姓と会田姓の両姓を用う」と云う記載が所々に見える事である。

★「三代宗圓、実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男、此の仁自り、会田両姓を用う」

★「二男、幼名平蔵崎玉高曾根頓吏を以て分株し、会田両姓を用う」

何故、「三代宗圓」以来齋藤家では、会田両姓を用いたのだろうか、「不思議な事が記されている」と記したのは、之の事である。

★三代宗圓、「実は武蔵国越谷駅郷士会田出羽守の男」

この記述は、三代目を相続した「宗圓」は、齋藤家の婿、「越谷駅郷士会田出羽守の男」で、会田家依り婿養子に來た者である。

所が、三代宗圓が齋藤家に婿養子に来て後、実家の会田家の兄が死亡した。

会田家には嫡子無く相統人絶えるので、齋藤家に婿養子に行った、弟の「宗圓」に、帰って来て会田家を継いで欲しい所である。

今更、出来ないので、齋藤家の家譜に見る如くに、『宗圓、実は越谷駅郷士会田出羽守男、此の仁より会田両姓を用』と云う事に成った事と思われる。

実家が絶家と成る為に取りられた、苦肉の策の処置では無いだろうか。

之の、齋藤家譜に見る「越谷駅郷士会田出羽守家」とは、何所の会田家で有ろうか、齋藤家譜からは、詳に出来無いが、「新編武蔵風土記稿」・「四丁野の会田太郎兵衛家日拝帳」・「越ヶ谷瓜の蔓」・「東路の都登」・「小田原所領役帳」等に記載されている断片的記述を、照合して推考すると、次の如くとなる。

新編武蔵風土記稿

南後谷

旧家者富右衛門家

『「会田三郎左衛門正重は、出羽介正兼が孫、源太正富が子なり、当国鉢形城北条氏邦が摩下に属し、越谷の地に住す。」

その子若狭正方は、太田十郎氏房に従いて討死すその子若狭正忠二男出羽正之と云う。
正之越谷に住す」とあり、

「今越ヶ谷に会田氏の子孫無し、衰微して江戸に移れりと云う」と記載され、

「之の富衛門の家は、彼の越谷に住せし会田氏の一族也哉、系図は、所持せされ共、詳なる事を知らず」

新編武蔵風土記稿

越ヶ谷宿

出羽井掘

『「相伝う、会田出羽介正之、当所に住し、掘開しを以て斯く唱う」

「会田氏の事は、後谷村旧家者富衛門の条見る可し」』。

越ヶ谷瓜の蔓

出羽井掘之儀は、会田出羽願立、新規掘筋当り取立申候所。

東路の都登

永正六年（二五〇九）作

小田原北条家臣会田中務丞の所領した葛西の地に、会田彈正忠定祐と名乗る武士が見える。

「東路の都登」の著者は、連歌師「宗祇」の門人で「紫屋軒宗長」と名乗る連歌師である。

「宗長」は、今川義忠の臣で、祖は、刀匠島田義助の五代の孫、島田治家の子、寛正五年（一四六三）宗祇の門に入り連歌を学ぶ、武蔵方面を遊歴したのは、永正六年（一五〇九）彼の六九才の時の作とされている。

東路の都登（抄）

「市川と云う渡りの（中略）葦の枯葉の雪うちはらい、善養寺で云うに落付きぬ。（中略）ここは炭薪などまれにて芦を折り炊き、豆腐をやきて一盃をすすめしは（中略）今日の暮ほど会田彈正忠定祐の宿所にして夕食の後も色々の事にて夜更けぬ。（中略）市川、隅田川ふたつの中の庄なり、大堤四方にめぐりて、折しも雪ふりて山路を行く心地しはべるなり、江戸に帰りつき、（下略）」

小田原旧記（抄） 天文末期成る
御馬廻衆 一手 百二十騎中に 会田中務丞

小田原衆所領役帳（抄） 永祿二年記
一、会田中務丞
三拾貫文 江戸、下平川 内年賣内に
て下さる

百貳貫貳百五拾文 半役葛西小岩

九拾三貫四百文 同 飯塚
五拾壹貫貳百五拾文 同 奥戸
以上貳百七拾六貫九百文
此内百五拾三貫五百文

改めて地行役、可被仰付

以上の事柄より

◎ 永正六年（一五〇九）作、「東路の都登」中の、

「葛西小岩善養寺付近に居住した会田彈正忠定祐」

◎ 天文末記（一五五〇頃）「小田原旧記」中の

「御馬廻衆の会田中務丞」

◎ 永祿二年（一五五九）記、「小田原衆所領役帳」

「江戸衆 二十二番目 会田中務丞」に記載

※ 「会田彈正と、会田中務丞とは、同一地域で、大永四年（一五二九）、小田原北条氏が葛西城・鴻之台城攻落しているので、この時代に北条氏の家臣となったものか。

◎ 永祿二年（一五五九）記、

「小田原衆所領役帳」中 「九拾三貫四百文 同 飯塚」この飯塚の会田家よりの分枝が、「南後谷 会田富右衛門家」である。

◎ 天正六十八年（一五七八〜九〇）「会田三郎

左衛門正重、北条安房守氏邦に属し、越谷に住」

○ 天正六(十八年(一五七八)九〇) 「会田若狭守正方、太田十郎氏房に從い討死」

以上考案すると、四丁野会田太郎兵衛家の、先代である、「八郎左衛門 道蓮禪定門」は、「会田出羽正之」と、同人と云う事になる。

○ 天正末頃(一五九〇以前) 「会田若狭守正方二男出羽正之、越谷に住し、出羽井掘を開く」

南後谷会田富右衛門家譜

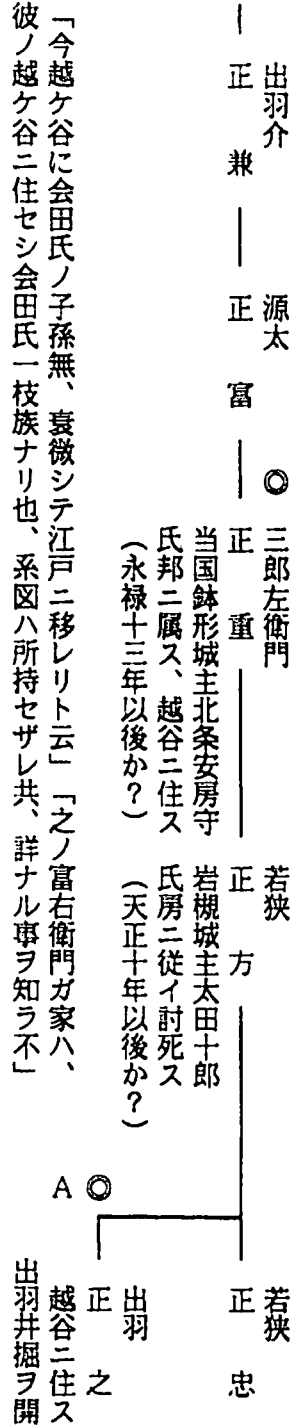
(南後谷は現八潮市南後谷)

○ 旧家者富右衛門

新編武蔵風土記稿

南後谷の項

(前略)



「今越ヶ谷に会田氏ノ子孫無、衰微シテ江戸ニ移レリト云」 「之ノ富右衛門ガ家ハ、彼ノ越ヶ谷ニ住セシ会田氏一枝族ナリ也、系図ハ所持セザレ共、詳ナル事ヲ知ラ不」

註 1、AとBとを対比して見ると、A II 出羽正之が出羽掘を開くのは、天正末年頃で、B II 会田八郎左衛門の没年は寛永六年二月二十日没とある。

AとBガ、同人とすれば、A II 仮に、天正十年に十五才とすれば、永祿十年(一五六七)生れとなり、天正八年に二十三才、B II 会田八郎左衛門が寛永六年二月二十日没で、六二才となる。

註 2、四丁野会田太郎兵衛家の家譜に、「小田原北条家に仕え」「会田出羽守と云」「当代で会田三十七目」を数えたと記され。又、一次開発者、会田出羽正之が出羽掘を開くので、出羽村の地名が残る。

四丁野

会田太郎兵衛家系譜

太郎兵衛家日拝帳より

(現川口市元郷居住)

B ◎

会田出羽守家

会田八郎左衛門 先代

道蓮 禅定門

寛永六年二月二十日 卒

(一六二九)

先代妻

慶秋 禅定尼

万治三年九月十日 卒

(一六六〇)

会田七郎兵衛 先代

善心 禅定門

正保二年十一月二十四日 卒

(一六四五) 父八八郎左衛門也

花屋 妙香尼

寛文三(一六六三)年五月廿二日 卒

C ◎

夏月 浮散 清信士 先代

寛文九年五月二十八日 卒

(一六六九)

妙蓮 清信女

明曆三(一六五七)年六月十四日 卒

先代

桜讀 妙喜 清信女

元禄十三(一七〇〇)年一月十七日 卒

初代会田太郎兵衛

二代伝次郎

太郎兵衛嫡男

徹通 円翁 清信士

明和八年正月十八日 卒

(一七七二)

芳林 智盛 清信女

享保九年四月二十日 早世

(一七二四)

三代太郎兵衛嫡男

俗名太吉郎

華月 円分 清信士 以下略

寛保三年七月廿七日 廿五才

(一七四三)

法林 惠光 清信女

寛政元(一七九五)年七月九日 卒

北谷村田中左平太娘

三代目太郎兵衛妻

◎

松寿 高栄 清信女

寛保四(一七四四)年正月十一日 卒

当屋舖初代妻当家御取立之元祖也

二代太郎兵衛後妻

秋光 栄繁 清信女

寛保二(一七四二)年三月四日

草加在立野より来る。

四丁野

△云田山出羽守家 (現越谷市宮本町二)
△云田太郎兵衛家 (現川口市元郷住)

の山白白

四丁野会田出羽守家の後胤と云われる会田家は、現在は、川口市元郷に住んでいる。

嘗て、越谷市宮本町二丁目(出羽村四丁野)に在り、現在は川口市元郷に移り住む、会田太郎兵衛家十代の現当主会田春子氏談、

「当家の伝承」に依れば、

『先祖は、会田出羽守と云い、小田原北条氏に仕えて居た』

『私の亡夫義盛の代で、十代太郎兵衛だが、実は会田三十七代に当たると云う。』

南後谷会田家々系図の内に、「出羽正之越谷ニ住ス」「出羽井掘開ク」と記されている「会田正之家」は、当家であろうか、会田太郎兵衛家(川口市元郷住)の日拝帳には「先代八郎左衛門」と記してある。

新編武蔵風土記稿 「南後谷の項 旧家者 会富右衛門家」 家譜中の「出羽正之越谷ニ住ス」と有る人物と「会田太郎兵衛家先代 会田八郎左衛門 法名 道蓮禪定門」と同一人物では無かるうかか。

南後谷会田家系図に有る、「会田出羽正之」は、四丁野会田太郎兵衛家の先代、「会田八郎左衛門」であろうか？

「新編武蔵風土記稿」や「越ヶ谷瓜の蔓」の記述によれば、

新編武蔵風土記稿 越ヶ谷宿 出羽井掘
宿ノ坤ノ方ヲ流レル悪水掘ヲ云。相伝フ会田出羽
介正之当所ニ住シ掘開キシヲ以テ斯唱フト。
会田氏ノ事ハ、後谷村旧家者富右衛門ノ条見ルベシ。

越ヶ谷瓜の蔓

出羽井掘の儀、会田出羽願立、新規掘当り申候所。

因に、神明町住の初代 会田七左衛門正重が開いたと云う、「七左衛門村」に入殖した旧家と、「出羽村根通り」に住む旧家と比較すると、「出羽村根通り」の方が一・二代古い事が確認出来るので、第一次開拓者は、「出羽会田正之」で、第二次開拓者が、「会田七左衛門」と云う事になる。

「出羽村」「出羽掘り」等の「出羽」の名称は、之の「出羽会田正之」の出羽を以て、名付けられたものと、首肯する事が出来る。

以下、「新編武蔵風土記稿」「越ヶ谷瓜の蔓」を合せ、南後谷会田家と四丁野会田家との関係に仮説を立てる見ると次の、如くなる。

關係系図(仮説)参照

南後谷会田△云田家と四丁野△云田山出羽守家との關係
(現八潮市南後谷) (現会田太郎兵衛家)

南後谷会田富右衛門家 (前略)
若狹
正 方
岩槻城主太田氏房
二從イ討死ス
天正九年以後ノ事
(一五八一)

若狹
正 忠

(同一人物か?)

出羽 正之
越谷二住ス
出羽井堀ヲ開ク

*仮に、天正九(一五八一)年の時
十一才とすると元龜元(一五七〇)
一年生れとなる

四丁野会田出羽守家
会田八郎左衛門 先代
四丁野会田出羽守家
会田八郎左衛門 先代
道 蓮 禪 定 門
B ○ 寛永六(一六二九)年二月廿四日卒

*仮に、寛永六年五十七才卒とすれば
元龜元(一五七〇)年生れとなり、
A || B に符合する

先代妻

慶 秋 禪 定 尼
万治三年(一六六〇)九月十日 卒

*仮に、七才年下として万治三年(一
六六〇)八十三才卒とすれば、天正
五(一五七七)年生れとなる

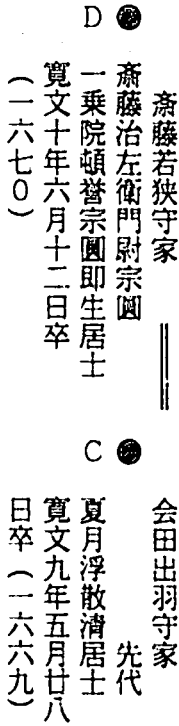
文扇藤家と△云田家との關係

四丁野会田家の家譜には、初代太郎兵衛の項に、「松寿高栄清信女、寛保四（一七四四）年正月十一日卒、当屋舖初代妻当家御取立之元祖也」とある。

初代太郎兵衛は、先代会田氏（夏月浮散清信士、の後妻 桜讀妙喜清信女元禄十三年二月十七日卒）より、四十四年後となり、没年ですので確とは言えぬが、一度絶家と為り、「当屋舖初代妻当家御取立之元祖也」と有り、御取立て、会田出羽守家を復活したものと思われる。

其の間の繋ぎとして、西新井の齋藤家が会田両姓を名乗ったのでは無いだろうか？。

因みに、齋藤家と会田出羽守家との、年代的關係を推測すると、下記図の如くなる。



齋藤宗圓の実家の兄（養子に來たので実家は会田出羽家）夏月浮散居士は兄が、居た筈で、之の兄が相続人無く死亡した、やがては絶家と成るので、其の繋ぎとして齋藤姓の弟が、両姓を継いだと見るべきである。

三代宗圓も又、不運にも其の翌年卒し、宗圓の二男平蔵が分株して会田姓を用い、五代徳実会田齋藤両姓を用い、六・七代は会田姓を、八代真武（宝曆十二年（一七六三）生れ、天保七（一八三六）年卒）の時、再び齋藤姓に改める。

一方四丁野会田家では、御取立之祖として初代会田太郎兵衛を立て、同屋敷等を相続させて、初代会田太郎兵衛家と變り、創設されている。

会田出羽守家の血筋は、齋藤家に継がれ、家屋敷・財産は、四丁野会田太郎兵衛家が相続した事になる。

今、会田出羽守家は、四丁野会田太郎兵衛家が継ぎ、四丁野より川口市元郷二丁目に移り、元屋敷跡は、建売住宅地となり、構え掘と愛宕神社が、往時の面影を残している。

西新井齋藤家も又、栄枯盛衰の習いの如くとなる。

嗚呼、惜しい哉、名門、会田出羽守家、齋藤家は、哀れ屋敷跡地を残して、時代の趨勢に抗し切れず、我が郷土の希少な名家も遂に絶家とは成りぬ。

参 考 資 料

小田原編年録
新編武蔵風土記稿
四丁野会田家日拝帳
斎藤家来由
越谷市史
越ヶ谷会田家々譜

題 四丁野会田太郎兵衛家
の先祖に付いて

発刊日 平成三年十二月三十日

著 者 越谷市弥生町1-9
山崎善司

印刷所 越谷市弥生町1-9
山崎企画工房
☎ 6213733